

武蔵野日曜聖書講筵

天然と靈法

―― 詩篇第19篇 ――

1973年1月7日

小池辰雄

「愛そのもの」(詩) 詩篇19篇(私訳) 森羅万象は神の栄光 楽天家 靈的具體なる神 キリ
ストの靈光靈熱 即法體現 愛法 十字架の碎け キリストという法体 包摂の愛

【詩篇19】

うたのかみに謳^{うた}わしめたるダビデのうた

1 もろもろの天は神のえいこうをあらわし、穹蒼^{おおぞら}はその手^{みて}のわざをしめす。

2 この日ことばをかの日につたえ、このよ知識をかの夜におくる。

3 語らずいわずその声きこえざるに、

4 そのひびきは全地にあまねく、そのことばは地のはてにまでおよぶ。神は
かしこに帷幄^{あびばり}を日のためにもうけたまえり。

5 日は新郎^{にいむこ}がいわいの殿をいづることく勇士^{ますらお}がきそいはしるをよろこぶに似
たり。

6 そのいでたつや天の涯^{はし}よりし、その運^{めぐ}りゆくや天のはてにいたる。物とし
てそのあたたまりをこうぶらざるはなし。

7 エホバの法^{のり}はまたくして靈魂^{たましひ}をいきかえらしめ、エホバの証詞^{あかし}はかたくし
て愚^{おろか}なるものを智^{さと}からしむ。

8 エホバの訓諭^{さとし}はなおくして心をよろこばしめ、エホバの誠命^{いましめ}はきよくして
眼^{まなこ}をあきらかならしむ。

9 エホバを惶^{かしこ}みおそるる道はきよくして世々にたゆることなく、エホバのさ
ばきは真実^{まこと}にしてことごとく正し。

10 これを黄金^{こがね}にくらぶるも、おおくの純精金^{まじりなきこがね}にくらぶるも弥増^{いやまさ}りてしたう
べく、これを蜜にくらぶるも、蜂のすの滴瀝^{したたり}にくらぶるもいやまさりて甘し。

11 なんじの僕はこれらによりて儆戒^{いましめ}をうく。これらをまもらば大いなる報賞^{むくい}
あらん。

12 たれかおのれの過失^{あやまち}をしりえんや。ねがわくは我をかくれたる愆^{とが}より解放^{ときはな}
ちたまえ。

13 願くはなんじの僕をひきとめて故意^{こいねい}なる罪をおかさしめず、それをわが主



たらしめ給うなかれ。さればわれ暇なきものとなりて、大いなる愆をまぬかるるをえん。

14 エホバわが磐わが贖主よ、わがくちの言わがこころの思念なんじのまえに悦ばるることを得しめたまえ。

●「愛そのもの」(詩)

司会者から話がありましたが、川口愛子姉は特別なひとでありました。けれども、その特別がいわゆる特別ではないので、飾り気のない、日本の女性としてまことに、言葉の一番深い意味において典型的なひとであった。川口さんは、いわゆる霊的なひとではないので、まさにコリント前書13章の、それがしみ込んでいようなひとです。全く天的でありながら、非常にまた人間的なものも溶けている。説明のできないようなひとです。というのは、あのお母さんは、私は実は驚いたのでね、お母さんが本当に愛そのもののような女性でした。なるほどこのお母さんにふさわしい、この母ありてこの娘ありと、正直そう言える。そこにキリストの愛が入ってきたというわけです。

今、実は詩は持っているんですけども、読もうか読むまいかと思っていたのですが、まあ読もうかな。私はその報せを聞いた晩にずっと書いた書き下ろしです。「愛そのもの」という題です。

「愛そのもの」

――川口愛子姉――

ころは一九四八年の中秋、

浅間高原小諸の市の

一角に集いがあつた。

無教会信徒の集まり。

語り終わって彼は

来会者の氏名を問うた。

右うしろの片角に

三、四人の婦人がいたが、

その中の一人に

その名は川口愛子という

ひとみ美しき婦人があつた。

その婦人たちの存在から

漂う妙なる雰囲気。

〔註 小池辰雄著作集第九巻『感想と紀行』164頁に所載〕



それは都会では
彼が経験したことのない
あたたかい愛の香り。
その後の交わりにおいて
彼女の母なる
川口露野姉は、
まこと、愛の権化！
彼はこれをつぶさに知った。
この母ありて、
この娘あり。

彼女は脊椎カリエスの
病弱の身を推して、
碓井峠をくだったの町
松井田に天蓋孤独の病者を
そのあばら屋に訪ね、
ねんごろにいたわり、
その人の死出の衣替えをした。
かくて生き別れの
告別のつどいを
彼と彼女と三人でなした
その想い出が彼の胸に
昨日のようによみがえる。

ある夜、
彼はみ霊に感じて、
一夜彼女の病床に侍り、
たましいを籠めて祈った。
その按手をとおして彼女、
全身、御霊にバプテスマされ、
はげしき靈動ののち、
異言ほとばしってやまず、
カリエスは癒された。
「先生、身心がすっかり軽くなりました。」



本当にふしぎでございます」
彼は平伏して、
聖名を讃え、神に感謝した。
彼女、無教会信者のゆえに
ある妨害によって、
しばし曲折はあったものの、
はつきりみ霊の人とはなった、
使徒的信仰の旗じるしのもと。
生まれながらの愛の人に
更に深い天来の愛！

若き日の病弱のゆえ、
結婚問題に破れ、
言い難き心の痛みを負っていた彼女。
今や

聖霊の愛に包まれ、
キリストのみ腕に強められ、
浅間への山路を辿り、
小諸療養所をしばしば訪ね、
病者をなぐさめ、
福音を語る。

親子の契りを結んだ川口真理子姉は、
そのようにして救われた。
貧しきながら、
惜しみなく人に与え、
友情を尽して
右の手のわざを左に知らせず、
なやみあらば
親しく聴いてなぐさめ、
悲しみあらば
共に悲しんでいたわり、
病めるあらば
ひまわりの宿は病院となり、
病みあがりあらば



川口の家は保養所となる。
その薬は何か、
主にある愛の心と手足。
初夏の候には
避暑のはたごやともなった。
結婚の問題あらば
よく執り成しをなし、
若き男女の
縁結びの愛労をとわず、
「よかった、よかった」と
肉親の如くよろこぶ。
彼女自身の
ひとり身の寂しさを
誰か知ろう。
主は知り給う。
そのハートの祈りを。
彼女は本当に、
身も心も家も、
主に献げて生きていた。
福音のため独身を貫き、
却て多くの兄弟姉妹の
霊的なハートの母となり、
石垣会はおろか、
同信の人々に
「ママ、ママ」と慕はれていた。
愛のわざ、
祈りの重荷のためか、
数年前、
突如、脳溢血に倒れ、
言語と身体からだの自由が奪はれ、
半ば不具者の境涯に入った。
意識の奥の
彼女の祈りと



愛の存在に
変りはなかった。

この度、

突然、吐血のため、

ついに重態におちいった。

昼夜をわかたぬ真理子姉の

また同信の者の看護も空しく、

一九七二年一月二七日！

ついに

彼女の靈魂は

み使の翼に乗って

主のみ許に

昇っていった。

余りにも

深い悲しみ！

彼はただ独り、

むさし野の曠野に祈る。

十字架！

彼女は生涯を通して

十字架を負い貫いた。

しかしそのかんばせは

つねにほほえみを^{たた}え、

不平不満の色更になく、

うらみ、ねたみの影もない。

み霊と

み言の剣をもつて

不信とは

戦いぬいた。

主の十字架と

み霊の中に

つねに新たに自分をおいて、

碎かれ

かつ満たされつつ、



ひとをゆるし、
ひとを包んだ。

主にある愛の人よ、

愛そのものよ…

その名の如く。

浅間高原の

とっておきの

大和撫子が

ここに散った！

冬の夜はふけわたり、

あかつきの星影一つ、

靈しくも十字架に光る。

十字架よ、

彼女の負いし。

み霊の呻き。

沈黙の祈り。

胸底から力強く

アーメン、ハレルヤ！

聖名は耀う。

しかし、人間ですから、いろいろ欠点もあつたろうと思う。そういうようなことは言うことではない。我々は要するに一人のひとを通してキリストがいかに働きたもうたか、ということを見ればいいので、川口愛子姉というものを決していわゆる祀るようなことをしないように。

まあ幸い私は非常に欠点だらけの男ですから、祀られることはとうていありえないので、非常に安心してゐるんですが（笑）。その極めてダメな野郎がいかにキリストによつて生きるかと。そして、この福音のためには全世界をも相手にする、ということの証明だけはどう思うっている。その点では私は絶対に自信がある。ということとは、自分の自信ではなくて、それはキリストの、御霊の、御言の本当のわざであります。そういうことで、我々はいよいよ進んでいただきたい。

●詩篇19篇（私訳）

詩篇の19篇に入ります。かつて私は訳したのがありますので、自分の訳を見ながらやります。



1 諸天は神の栄光をあらわし、
聖手の業を蒼穹はしめしている。

2 昼は昼に靈語をそそぎ、
夜は夜に靈知をつたえる。

3 告ぐるなく、また語るなく、
その声も聞こえこそせね、

4 その響きは全地にゆきわたり、
その言は地の極にまで及んでいく。

陽のために彼は帷幄を彼らのうちに設け給うた。

5 陽はその殿を立ち出づる新郎の如く、
喜んで勇士のように馳場を駆せてゆく。

6 天は諸天の極みより彼は現われ、
その極にまで巡りゆく。

その光より隠れあるものとてない。

7 ヤーヴェエーの法は全くして、魂を活き甦らしめ、
ヤーヴェエーの証は真にして、愚かな者を賢くする。

8 ヤーヴェエーの論は直くして、心を喜ばしめ、
ヤーヴェエーの戒は潔くして、眼を明かにする。

9 ヤーヴェエーの畏は清くして、永遠に立ち、
ヤーヴェエーの審は真にして、すべて義しい。

10 是らは黄金よりも、多くの純金よりも慕わしく、
蜜よりも、また蜂の巣の滴瀝よりも甘い。

11 あなたの僕は是らによつて誠められ、
是らを守るとき報復は大である。

12 過誤を誰が気付きましょう。
隠れたことから私を潔めてください。

13 また高慢からあなたの僕をひき戻してください。
そんなことを私に主たらしめませんように！

そのときには私も全き者となり、
大いなる罪から解かれて罪なき者とされましょう。

14 わが口の言が悦ばれ、

わが心の想いが聖前に至らんことを！

ヤーヴェエーよ、わが巖、わが贖主よ！（私訳）



●森羅万象は神の栄光

1節から6節が前段で、7節からが後段です。ユダヤ人の意識は、

「この天地は神に創造されたものである」

ということ。

「^{てん}諸天は神の^{さかえ}栄光をあらわし、

という、この第一言は素晴らしい。「諸々の天は神の栄光をあらわし」ということは要するに、

「森羅万象は神の栄光を現す」

ということですよ。今の現代人の意識からいっても、宇宙はたくさんの宇宙から成り立っている。気が遠くなるほど驚くべきものです。そういった諸々の天界が、これが一切神の栄光を現す。

ですから、

「神とは何ぞや」

なんていったって、これはとうてい人間の側から憶測ができず、限定もできない。そういう非常に壮大な神の意識です。私たちが「神」というようなことを言うと、

「一体、神さまというのはどんなもので……」

と、すぐ対象的に聞いて、

「そんなものは信じられるか」

なんていうのが普通の人たちの判断ですよ。

「でも、そんなことを言うと、小池先生に叱られるかもしれませんが……」

なんて、ことわりを言いながらね(笑)。

「私がつかんでいる、私たちの捕まえさせられている神は、君たちが想像してそれを否定しようというような、そういった神ではないぞ」

と。そんなことを説明したってしょうがないから、黙ってしまうんですけれども。そういう啓示の、何とも名状することのできない神。

それは大宇宙がその栄光を現しているということ。決して太陽が神化されない。ギリシア神話みたいに、ヘリオスなんていう神さまにはならない。太陽といえども、これは地球にとっては絶対的な存在だけれども、大宇宙からいうと、太陽なんてのは小さな星だよ。アンタレスという夏の空に出てくるサソリ座なんていうのは、あれの真ん中にある赤い星は、直径が太陽の約50倍あるそうですから、もの凄い光を本当は持っている。あまり遠いものだからあんなに小さく見えるんだけど。

まあ私も天文学をやればよかったと思う。もつと気宇が壮大になると思うんですが。素人あがりでもこれから少し勉強しようと思っっています。私はとにかく知識欲も相当あるんですよ。本を読み出せば、また面白くてね、学校なんか行きたくなくなってしまふ。

そういう神の栄光を現している。このひとつの花がそうです。どんな小さなものも神の



栄光を現している。石ころひとつも神の栄光を現している。何でも神の栄光を現している。自然を見たら楽しくてしょうがない。自然はなんと素晴らしいか。これは神の栄光の見えざるひとつの文字である。文字以上の文字です。我々、このひとつの花を説明しようとしたって、大変だ。ところが、花はひとつも説明しないで、あるがままをもつて――それは何とでも解釈しろと――無言で神の栄光を現している。やはり、本当の世界というものは、それ自体が、その現象それ自体が、本質と現象が、一如になっている。この現象と本質が一如になっている世界が本もののなんです。

●楽天家

だから、何といったって、キリストをみれば一番よくわかる。イエス・キリストはまさに、大自然の栄光もこれにかなわないところの、神の栄光体です。世のひとつの花を見て、「これは神の栄光を現している」

と言って、キリストは見られた。イエス・キリスト自身は本当に神の栄光体であります。だから、私は

「体現」

という言葉が好きなんだ。もう説明はだめ。体現。まさに存在そのものをもって現す。大体、そういう世界は、日本人が一番実は持ち前に持っているはずなんです。それをえらくイデオロギッシュになってしまつて、主義だとか主張だとか言う。なぜ、「無教会主義」なんてくだらないことを言うかと思う。

本当の人間性は一切のイズムを超えてありたいものである。そういうことで、今、一番日本で大事な問題は教育ですよ――「教育」という言葉は嫌いだけれども――教育者自身の問題です。教育者自身が真理の体現者、実証者にならなくては。

ひとはみんな、ここに何人いても、みんなちがう。そして、お互いさま長所と短所を持っている。そういうようなものを問題にするうちは、いつまでたつてもダメです。要するに、どんなものでもいい。三角を通し、四角を通し、星型を通し、丸を通し、何を通していいんですよ。要するに問題は、ここに本ものが通りさえすればいい。

「私はもつと丸になりたいのに、どうも三角で困りましたが」

なんて。何も困らない。三角で結構ですから。その三角を通つて、これが光る。それがあの凄惨三角になる。ああ、あの三角はいいなと。

まあ、クリスチャンほど本当は楽天家はないはずなんです。人を羨んだり、嫉んだり、妬んだりすることはひとつもない。本当の楽天主義というものは――主義ではない――楽天家は、これはクリスチャンにあるわけです。

「楽天」というのは天を楽しむという。これは素晴らしい。天を楽しむ人。本当にそうです。キリストというこの天体をいただきまして。これは天体なんだから――星ではなかった――



―天体はキリスト。キリストという天体をうちに宿して楽しむものが、これがクリスチャン。だから、これを楽天家という。そういう楽天家になってくださいね。そうしたら、何がどうなったって大丈夫です。

私は本当に掛け値なしにそう言っているんですよ。幸い私はダメな野郎だから、なおさらはつきり言う。これは立派な人だと、

「ちよつと、俺自身が惜しいな。もう少し価値を置いてもらおうかな」

なんて(笑)。そこで、私はブラウニングの詩が好きなんだよね。

「私がおよそ価値あらざりしことが価値であつた」

という。

そういう神の栄光。栄光体はキリストが即ち、大自然の中の実が一番中心なんです。だから、

「宇宙的キリスト」(コスミッシェル・クリストス)

宇宙的なキリストです。そうしたら、天文学者もそれくらいの気宇をもってやったらいい。あなたの方の中には天文学者はいないか。これからでも遅くなかったらやってくださいよ。

●靈的具體なる神

聖手の業を蒼穹はしめしている。

と。旧約は非常に大胆に神の顔だとか、神の手だとか、神の足だとか、そう言いながら、ひとつもそれが偶像にならない。非常に具体的な表現の仕方をしながら、これは超観念の世界、超観念である。靈的具體性というかね。この靈的具體なる神を現すのに、人間の五感でもって感ずるところのもので表現するよりか仕方がない。五感で感ずるようなもので表現するが、それで躓いては困る。表現された内容はみな靈的な具體の世界である。それが靈肉渾然^{こんぜん}として最後にもの凄いことになっていく。

これは黙示録も実はそれを表現しきれない。黙示録でも表現しきれない。黙示録だって、これはしょうがない。もつと凄いんだから。それだけの、望みというなら、それはちつぽけな自分の望みではない。神の大世界の、実現をこそ望む。

「わが望みは神の望みを望みとするなり」

と。

2 昼は昼に靈語をそそぎ、

夜は夜に靈知をつたえる。

「知識を伝える」の「知識」という言い方がうまくない。知識というと、我々現代人には、すぐ頭にくる。これはそんな知識ではない。言と知とが一つなんです。非常に靈的人格的な知です。この「言」もいわゆる表現された言葉以上の、奥の言。異言的な靈言な言です。だから、それは聞こえない。聞こえないけれども、ちゃんと伝わっている。

眠っていて夢の中で、夢か現かというようなくあいに示されることがあるでしょ。そう



いうのですね。だから、昼も夜も、要するに昼は昼でよし、夜は夜でよし。どちらも神の言が、神の靈知が澎湃^{ほうはい}としてくる。

肉の耳には、今、電波がたくさん来ているけれども、聞こえない。テレビやラジオを通してないと聞こえてこない。受信機式に我々がなっていると、神さまの御声が聞こえてくる。けれども、それは妙な神秘的なことを言っているのではない。いわゆる直接啓示の、お告げさんみたくなつては困るよ。そういうことではありませんけれども。

既に聖書において伝えてある神の言が、今新しく自分への言として、それが儀文ではなくて、靈言として伝わってくる。ひらめいてくる、それが無限に展開してくる、というようなものです。基礎になつてあるものはやはりこの聖書に示されているところです。キリスト中心に示されていないものは危ないからね、そういった直接啓示は。そういう人があるんだよな。お示し^{おし}になつてしまつて。

³告ぐるなく、また語るなく、

その声も聞こえこそせね、

⁴その響きは全地にゆきわたり、

その言は地の極^{はて}にまで及んでいく。

この響きです。我々もこの聖書の言がひとつの響きなんです。聖書の言が、グーッと生命が伝わるような、その響きとして伝わつてこなかったら。我々が素晴らしい音楽を聞くと、その響きは私たちの心を本当に喜ばせる。あのベートーベンの第九なんてのを聞いているとね、ヘンデルとか。

そういう世界は深い祈りの世界です。魂が呼吸して、魂が目となり耳となつてある世界です。その魂が目となり耳となつてあるような世界ですから、それは行き詰まりをしらん。我々がもしロビンソン・クルーソーみたいはどこか孤島に行つたら、聖書一卷持つていけば大丈夫。その聖書一卷も破れてしまつたら、自分の中に生きてあるようなことになつていくわけです。

どうですか、聖書をどこか暗記し始めましたか、正月元日から。私も元日から読みかけています。まだ線の引っぱつてないところを線引っぱろうと思つてね(笑)。私の読み方はそうです。聖書はたくさん、まだ白い聖書があるから。そういうのをまた新しく読むと、そういう楽しさがある。なにしろ、その時その時に、あなた方は楽しくやつてください。なにか囚われないで。

「聖書はやつぱり創世記1章から読まなくてはいかんかな」

なんて(笑)。そんなことしたら、途中で嫌になるよ。好きなところから読んでください、いいから。まあ創世記からお読みになつても結構ですよ。



●キリストの靈光靈熱

陽^ひのために彼は帷幄^{あけぼり}を彼らのうちに設け給うた。

⁵陽はその殿を立ち出づる新郎の如く、
喜んで勇士^{ますらお}のように馳場^{はせば}を駈^はせてゆく。

今度は、太陽を新郎にたとえ、勇士にたとえている。そして非常に勇ましい、明るいわけですが。

⁶天は諸天の極みより彼は現われ、
その極^{はて}にまで巡りゆく。

極みから極みまで馳せてゆく。東から出て西に落ちるから、これは極みより極みまで。この「極みより極みまで」というのは、「無限に」ということです。極みなく。我々の気魄というものも無限無量。キリストをいただいた者は無限無量です。そして、無限無量に展開してやまない。

その光より隠れあるものとてない。

「物としてそのあたたまりをこうぶらざるはなし。」

というのも結構な訳ですよ。私はこの前段でもって一番大事なのは――まあ第1節が一番だけれども――特にこの6節の「あたたまりをこうむらざるはなし」ということ。自然界に、彼らが見たときに、太陽の光、光熱に隠れるものはない。冬は寒いけれども、もしストーブを消して、そして向うからきているところの太陽の光を自分でグーッと冥想して暖かくなったら大したものだよ。

「心頭を滅却すれば火もなお涼し」

というけれども、

「心頭を集中すれば寒さもお暑くなる」

と。それくらいに神の栄光を本当に祈りの世界で受けとる。私たちは祈りの世界で熱くなるですよ、正直。燃焼する。なんでもつかい声を出さなくなっている。静かな声でも本当にキリストの霊が入ってくれば、燃焼するから。これはやはり上からの光熱、靈熱を受けているわけです、靈光、靈熱を。靈的な光と靈的な熱。このキリストの靈光靈熱で生きてくださいよ。もう今は公害が非常に私たちを、この都会の生活は侵害するけれども。この自然の侵害を乗り越えて、突き破って、キリストの靈光で必ず勝ちます。それだけ、魂が本当にキリストで生きていなくては。

私に会う人ごとに言うんだよ、

「先生は若い。少なくとも十年は若い」

と、もう度々聞くんだ。

「きつと運動をしてらっしゃるせいでしょう」

なんて。それは運動もやってたさ。今だってやるさ。けれども、一番の力は運動ではない。



そこは私は別に言わない。

「私は気が単細胞ですからね」

なんて言っているけれども。このキリストの生命をいただかなければ、私も生き甲斐がないし、またダメになるに決まっているんだから。

私たちにとって太陽の光は、正にこの霊界の太陽キリストの光です。

「このキリストの光を受けざるはなし。一切のものはこのキリストの熱を受けざる

はなし。暖まりを被らざるはなし」

という。キリストは地の果てより地の果てまでゆく。世界中いたるところに現れる。無極限に現れたもう。無極限、無量に現れたもうところのキリストの霊光、霊熱を受けて行く。この自然の栄光が神の栄光を現している。この前段において、私たちはやはりその背後に霊界の太陽を想わざるをえない。非常に詩篇19篇はその点で輝かしい。

ゲートがああ晩年の、特に死ぬ二週間くらい前に、

「霊界のキリストの前と自然界の太陽の前には、自分は無条件に頭を下げる」

と言った。なかなかゲートというのは面白い人です。ということは、彼は本当に「太陽の子」なんだ。光を非常に慕った。そして、全く光っているような非常に精神が明るい人でした。けれども、

「キリストの前には無条件に頭を下げる」

と。ということは、この霊界の太陽としてキリストを、いい加減なクリスチャンよりはるかにゲートという人は、やはりつかむべきものをつかんでいる。でなければ、あれだけの偉大な詩人にはなれない。

日本になぜ、本当の意味で偉大なものが出てこないかというと、この絶大なものを受けないからだよ。漱石さんも

「則天去私」

まで気がついてよかったんだけど、もう一歩だものね。

どうぞ、あなた方の中から――何をしていても、下駄屋でも何でもいい――何をするにしろ、それを通して、下駄を作るなら天下一品の下駄を作ったらしい。焼き物をするなら、右に出るものがない焼き物を作る。それは何といったって、技の世界ではない。技術ではないから。これをやっていきましよう。どんなことをしてもそうです。花ひとつ生けるにしてもそうです。

●即法体現

7 ヤーヴェエの法は^{のり}全くして、魂を^{かえ}活き甦らしめ、

ヤーヴェエの証は^{あかし}真にして、愚かな者を^{さと}賢くする。

これは素晴らしいです、後段の第一言は。さつきの、



「諸々の天は神の栄光をあらわし」

と同じように、第二段のこの7節。ヤーヴェーの法は全くして、魂を生き甦らしめる。魂を甦えらせる。ダルマ、法は活現させる。

今日の題の「天然と靈法」というのは、自然を「天然」と書いたわけです。本当に天を然りとする。天を然りとする世界です。この自然界はあるがままです。それを人工的におかしなことをするから妙なことになる。天を然りとしているすがた。即ち、我々人間も、常に天を然りとする。

それは即ち、靈法——靈法といつてもいいし、神法といつてもいいし、天法といつてもいい。天、神、靈と、何といつてもいいけれども——そういった結局、人間界も、靈界の法則も、自然界の法則も、もう一貫しているんですよ。そういった一貫しているすがた、あるがままの本当のすがたを「まこと」というでしょ。

『中庸』の中にもそういう言葉がある。誠まことというのはおよそ巧まないで、あるがままであるというような言葉がある。

「誠は天の道なり。これを誠にするは人の道なり。誠は勉めずして中あたり、思わずして得て、

従しようにう容として道に中あたる。」

「天道は誠まことにして、まことを本当に具現していくものが人道である」

と。即ち、

「天道を受けなければ本当の人道はない」

ということですよ。そういう世界が即ち、みな天然であり、この靈法に即する。

魂の生き方は、「従う」はいいけれども——私は藤井先生から「服従」ということはずいぶん聞いたよ——なんかこの服従というのは、ことに今の青年はうまくないと思うんだけど。なにか自分なくなってしまうようなことで。

神さまの命令に従わなかった不服従、不従順。しかし、それは服従よりかむしろ「信従」といいたい。信じ従う。この信従することは、もうひとつ内面的にグツと言おうと思つたら、これは「即」なんです。即するんです。「則天去私」の「則天」ということは素晴らしいことですよ。天に即する。即法なんです。法に即する。従うというと、なにか言い方が二段式な言い方になる。即一如。だから、「即如」というのは素晴らしい言葉です。ピタリ、一つの世界です。もうそこに間髪がない。重なってしまっているわけです。

そういう、法に即するというのが即ち、さっきの体現の世界なんです。

7 ヤーヴェーの法は全くして、魂を生き甦らしめ、

靈法に即しますと、魂は生きざるを得ない。即ち、

「律法を遵まもる者は永遠に活かえく」

と書いてあるけれども、あれは「遵まもる、遵まもる」と書いてあるね。遵法の遵という字。守るとなると、どうしても道徳的な何か律法的な角度がどうも出てくるんだね、「守る」



という言い方が。「律法を守る」という言い方がキリストの言にもたくさん出てきます。人間は守らないものだから、「守れ」と言われるんだけれども。本当は、「守る、守らない」なんていう事態ではなくして、即一点張りでいった方が、これが本当の守っている世界です。守るという意識もないような自然の世界に生きている。

「いつ私はいいいことをしましたか。知りません。あなたにいつしましたか。知りません。いつ私はいいいことをしましたか。知りません。あなたにいつしましたか。知りません。もう全然それは意識していない。キリストが、

と、天国に行くのはそういうやつだ」

と、マタイ伝24章にある。

「右の手のすることを左の手に告げるな」

と。そういうわけで、みな一番自然。人間はどうも意識過剰なんだ。「我思うゆえに我あり」なんて、あれは非常にまちがった。

●愛法

ヤーヴェエの証は真にして、愚かな者を賢くする。

8 ヤーヴェエの論は直くして、心を喜ばしめ、

ヤーヴェエの戒は潔くして、眼を明かにする。

9 ヤーヴェエの畏は清くして、永遠に立ち、

ヤーヴェエの審は真にして、すべて義しい。

この法を、「証」、「論」、「戒」、「畏」、「審」と分析して言っているわけです。モーセの十誡、その

「トラー」 「法」

という字を、戒めだとか、論しだとか、畏れだとか、審きだとか、要するにそれは全部、総合すれば、「法」ひとつになってしまふ。そのヘブライ語の意味をここで説明してもしようがないから、今日はやめます。この動詞からずっと分析すると面白いけれども、まあいいでしょう。旧約でいろいろ、

「こうしろ、ああしろ」

と、戒めや諭しやまた審きがある。「審き」という言葉を聞くと、すぐ「罪を審く」というように思うけれども、そうじゃない。

「正しいものを正しいとして認めていく。それぞれの位置づけをちゃんとしていく」ということが審きなんです。それが義しいと。

「愚かな者を賢くし、心を喜ばしめ、眼を明かにし、永遠に立ち、すべて義しい」

と、非常に明るく肯定して言っているのです、なにかそれを苦しいようにはとっていない。



非常にこのところも、ユダヤ人の法に対する喜びの気持が表れている。

「昼も夜もエホバの法を悦ぶ」

と、詩篇一篇にあったでしょ。「法を悦ぶ」という。法を悦ぶとなったら、これは本ものですよ。法はエホバの側からいうと、義なんだ。神の義を悦ぶ。

この「ダルマ」「法」という言葉には、愛という面がどうも薄いように感ぜられる。ところがそうじゃない。律法というと、あのモーセの十誡を聞いても、あそこに「愛する」ということは書いてない。ところが、キリストは、律法の根本精神は、

「心を尽くし精神を尽くし思いを尽くし力を尽くして、神を愛することである。」

また、己の如く隣人を愛することである。これが律法のすべてである。」

と。キリストはこの靈法を「愛」という一言をもつてつかまえてしまった。ここがキリストの福音の素晴らしいところなんです。申命記を読んでも、申命記法を見ても、申命記の中にもちろん法がいかに深い愛を蔵しているかということがわかる。「愛の刑法」という言葉があるそうだね。

そういう法の世界。法は活かす。法に即すると、それは永遠に生きるんですから。生命というものと愛とは離すことができない。愛のないところに生命はない。本当の生命のあるところには必ず愛があるはずですよ。

「永遠の生命」

というのは時間的に永いのではない。質的なんです。永遠の生命ということは、永生ということは、時間的に永くただ生き長らえるというのではなくして、その生命が永遠的であるということ、絶対に愛を持たなかったら、永遠的ではない。

「愛は永遠に保つなり」

という。愛だけが永遠である。

パウロのコリント前書13章は何といつても一番凄いところですよ。あの信仰の使徒はそのようにして愛をつかんだ。だから、パウロにとっても信と愛とは一つなんです。キリストにあのようにして贖われ、捕まえられ、愛せられたから、パウロはその

「キリストを受けとる」

ことを「信仰」と言っているだけのはなしで、そのキリストを受けとることを、「信ずる」と言っているだけだ。

「そのキリストの愛から何ものが私を離すことができるか」

と、ローマ書8章の終りの方に書いてある。

愛と生きるということは、人を活かすものは愛である。これはキリストの愛。キリストの愛は私たちを活かす。人を活かさないような、救い上げないような愛はまだ本ものの愛ではない。ただ感情的に愛するというのではない。相手を救い上げてしまう。そういう愛が本当の愛である。愛は即ち「救う」ということ。相手を助ける、救済する。



「敵をも愛する」

というのは、

「敵をも救ってしまおう」

ということ。敵を滅ぼすのではなくて、敵をサタンの中から救い上げてしまおう。これはキリストが来なかったら言えない。けれども、キリストが来たら、我々はどんなダメな野郎でもはつきり言える。

そういう、律法が、法をもって言われるこの事態が、魂を活かすという。魂を活かす法は何かというのと、「愛法」なんだ。愛法なんていう言葉はないけれども。法が即ち、愛の力を持っているから。神さまの意思、愛の意思ですから。愛の意思が即ち、法なんですから。仏教だってそうですよ。如来の慈悲心。これが法なんだ。

●十字架の碎け

10 是らは黄金よりも、多くの純金よりも慕わしく、

まあ純金というものはいいものだね。いいものだけれども、それよりも――物のうちでは何といったって、金だのダイヤモンドというのはいいに相違ない――けれども、

蜜よりも、また蜂の巣の滴瀝よりも甘い。

と。ここで非常に面白いのは、この後編で法のことを言いながら、

「法が慕わしくてしょうがない、甘くてしょうがない」

という。ここが素晴らしい。ちよつとこれは普通、考えられない。法が慕わしくてしょうがないという。今は、「法が慕わしい」なんて普通の人が思うですか。神さまの法が慕わしくてしょうがない。それはまた蜂蜜よりも甘いと。しかも、

11 あなたの僕は是らによつて誠められ、

是らを遵るとき報復は大である。

12 過誤を誰が気付きましょう。

隠れたことから私を潔めてください。

13 また高慢からあなたの僕をひき戻してください。

そんなことを私に主たらしめませんように！

「高慢」と私は訳しましたが、文語訳では、

「13 願くはなんじの僕をひきとめて故意なる罪をおかさしめず、それをわが主

たらしめ給うなかれ。」

とあるが、「故意なる罪」とは「高慢」ととった方がいい。高慢が一番恐ろしい罪なんです。霊的な罪です。肉的な罪よりか、霊的な罪の方が恐ろしい。これはサタンに属するから。高慢というのは意志的なものですから。聖霊に逆らう罪です。聖霊を汚す罪というのはこれです。これは聖霊に対する悪霊なんだから。高慢、傲慢は悪霊。高慢が一番いかん。



だから、

「砕け」

なんです、どうしても。砕けにこななければ救いはこない。その砕けも、我々は砕けないものだから仕方がない。キリストは十字架で自分が砕かれてくださった。この十字架の砕けによって我々は本当に高慢から解放された。

高慢は自己を中心とするから。神中心ではない。ところが、現代の罪はみんなこれだ。世界がもし引っくり返るなら、その原因は個人的に、社会的に、国家的にも、自己主張だ。大体それが物欲と関係している。何でも要するに、人間の欲だよ、我欲。自己中心。それからひき戻してくださいと。

それらをして私に主たらしめませんように！

と。私に主であるものは、あなたが主である。自分の主はむしろ砕けが主である。

そのときには私も全き者となり、

大いなる罪から解かれて罪なき者とされましょう。

「大いなる罪」即ち、サタンに従うような高慢の罪から解かれて、罪なき者とされる。旧約的な意味でなくて、新約的な意味ならば、もちろんキリストの贖いによる「罪なき者」です。

●キリストという法体

¹⁴わが口の言が悦ばれ、

わが心の想いが聖前に至らんことを！

ヤーヴェーよ、わが^い巖、わが^い贖主よ！

一番あとにこの「贖主」という言葉が出てきた。

「わが義よ、わが愛よ」

というのと同じです。この詩篇19篇は読むたびに素晴らしいなあと思う。どうぞ、新約の光で読んでください。そうしたら、この後半のところも、

「ああ、エホバの法はこんなうれしい。キリストの法は、キリストという法は、キリストという法ですよ、いいですか。法者は法の体現者だ。

法者は、これは本当にたのしいな」

と。こういうところは、概念の革命を起こさなければダメですよ。概念の革命を自分の中で。今までの因習的な考えに囚われないで。まあそうしたら、私はこうやってしゃべっているうちに、もう異言になりそうなんです、正直。

前に、「旧約知識」に『自然と律法』と書いた文章があります。ちょっと長いから読みませんけれども。4頁ばかり書いてありますが、またご参考に読んでみてください。



●包摂の愛

ベートーベンの第九シンフォニーにシラーの詩が出てくる。これがちょうど、あの

「にいむし新郎がその殿を立ち出で、ますらお勇士が駈はせてゆく」

という、ああいうところをちよつとシラーも思い浮かべたかと思う。

「ちよつと神さまの諸々の天体が喜ばしく走っているように、天を通つて自分の輝かしい軌道走っているように、君たち兄弟姉妹たちよ、君たちの人生の旅路を勇士の如くに喜ばしく走つて勝利に至れよ」

（天空の星々の喜ばしくも 輝かしき馳はせ場を飛ぶが如、同胞よ、君らの道を喜び走れ、英雄の勝利を目指して走るが如く！）

と、そういう句だとか。

「幾百万の人たちよ、勇ましく耐え忍べ。より善き世界のために耐え忍びなさい。この星の幕屋のかなたには偉大なる神さまが必ず報いてくださる。幾百万の人たちよ、あい抱け。この接吻を、この愛を全世界におよぼせ。はらからよ。星の幕屋のかなたには愛の父ぞ住みたもう。」

（雄々しく忍べ、千万の人々よ！ 忍べ、更に善き世界のために！ かの星の幕屋のかなたにて偉大なる神酬い給わん。）

と。「諸々の天のかなたに」というのは、それを超えて創造の神が在りたもうと。

こういうシラーとベートーベンの素晴らしい交響的な音楽を果たして、あるいはヘンデルのメサイアにしても、

「果たして本当にその気になって歌っているか、また本当にその気になって聞いているか」

ということが、音楽会に行つては、私は嘆かざるをえないような気がする。彼らは本当にそういった気持で歌いあげ、また作曲しあげた。そういう精神が今は、現代は一番失せてきたと思う。

どうぞ、皆さんは、今の若い方々で、特に福音に選ばれたあなた方は、年頭に当たつて、この詩篇19篇のような壮大な、

「この天然と共に神の栄光体となり、またキリストの栄光体をそのまま受けとつていく。この神の靈法が本当に自分を喜ばしめんとする所の愛の法である。この愛を受けとるところに、本当に法ならざる法が動いていく」

ということをつ身に体して、この一年を力強く、また本当に底力をもつて、また本当に一切を担いあげる包摂の愛をもつて、鍛えられていききたいと思ひます。終ります。

